

文学教材を通した言語化能力育成と文学作品への関心を高める工夫 —国語 I 芥川龍之介「羅生門」での実践—

石川 万里子^{*1}

Approaches to cultivating language expression and promoting appreciation of literary texts

Mariko Ishikawa[†]

This paper discusses the challenges in the first-year Japanese language course “Japanese I” at Kumamoto Campus and examines practices aimed at developing communication skills through literature. It focuses on repeated verbal expression exercises and activities using Ryūnosuke Akutagawa “Rashōmon”, which demonstrated notable effects in enhancing students’ ability to articulate thoughts and engage with literary texts.

キーワード：国語教育、コミュニケーションスキル、文学教材

Keywords : Japanese education, communication skills, literature as teaching materials,

1. はじめに

本報告では、熊本キャンパス初年次科目「国語 I」での課題と、文学を通してコミュニケーションスキル育成を目指した実践及びその効果について述べる。

熊本キャンパスでは国語科目として、第 1 学年から第 3 学年の「国語 I」～「国語 III」、4 年次「コミュニケーション言語論」、5 年次選択科目の「日本文学概論」を開講している。特に初年次では従来の国語教育に加えて、コミュニケーションスキルの育成を柱に教育を行ってきた。

現代の技術者に求められるコミュニケーションスキルは多岐に渡り、2023 年度改訂版モデルカリキュラム（以下 MCC）⁽¹⁾では、国語教育領域の目標を次のように示している。

（中略）効果的かつ対話的なコミュニケーションを実践することで、多様な他者を深く理解し、変化する状況にも柔軟に対応する言語能力や専門分野に関わる日本語の運用能力の向上を目指す。

また、学習で取り扱う項目の中で特に「報告や論文に関する事、文字以外のものを含む情報の取扱い全般、論理の構成と展開、口頭発表、議論、新たな発想や視点の獲得、自分の思いや考えの整理と深化」は教科横断的な連携が必要として、学校教育活動全体を通して取り組む必要性があるとしている。高専の学生に求められるコミュニケーション

スキルのレベルも時代の変化に合わせて高度化しており、チームでの協働、専門分野に活用できるファシリテーション能力やマネジメント力、プレゼンテーション能力等がある。改訂 MCC の目標も現代に必要なそれらの能力育成を意図したものである。熊本キャンパスでもリベラルアーツ科目や専門科目の中で、チームで協働しコンテストに挑戦する機会や、企業や自治体から課題をもらい、チームで課題解決に取り組む活動など、より高次のコミュニケーションスキルを要する機会が増えてきていると感じる。

よって現代に求められるコミュニケーションスキルを育むために「国語 I」では、基礎的なスキル育成の場として、他者との協働を通して視野を広げ、チームの中でファシリテーションを体験することでコミュニケーションスキルの育成を図ってきた。

「国語 I」で扱う教材としては、検定教科書「精選 現代の国語」（三省堂）に掲載される評論、エッセイに加え、芥川龍之介「羅生門」、夏目漱石「夢十夜」をはじめとする近現代文学、「竹取物語」、「平家物語」等の古典である。他にも独自の教材を導入し、教材をきっかけとしてディスカッションやディベート、ワールドカフェなど学生の対話的なコミュニケーションの場を醸成してきた。

このようなカリキュラムのもと実践を行ってきたが、近年の課題として、学生同士の対話の機会を多く設けることは出来ているが、対話の内容の充実が図れていない点や、育成したいコミュニケーションスキルが網羅的で、焦点化できおらず、効果的なスキル育成に繋がっていない点があげられる。特に昨年度から以下の課題が顕著である。

(1)表現力の中でも言語化する力の不足

意見の根拠・理由を説明できない。対話の中で「なんとなく」の多用。

1 基幹教育部門

〒861-11021 熊本県合志市須屋 2659-2

Corresponding author: Ishikawa Mariko
Faculty of Liberal Studies,
2659-2 Suya, Koshi, Kumamoto 861-1102, Japan
E-mail address:m-ishikawa@kumamoto-nct.ac.jp

(2)教材に対する興味関心の低下

本を読めない、読む意義が分からず、教材に興味が持てず、授業の対話に積極的に参加できない学生の増加。

学生同士の対話の中で、テーマについて考えや感想を交わすことはできている一方、意見の根拠や理由が乏しい学生、文章化できない学生が一定数いる。オリエンテーションの自己紹介の場面でも「興味関心のあるもの／好きなこと・もの／推し〇〇」について記述する場面で、「なんとなく面白いと思ったから」、「なんとなく始めたら好きになつた」、「友達に勧められたらハマったから」という理由を具体的に述べられない記述が見受けられた。興味関心のある事について、そのきっかけや理由を具体的に言葉にすることには苦手意識がある、表現の仕方がわからない学生が一定数いる。

また、令和7年度国語Iオリエンテーションでの読書アンケートで、一ヶ月に本を読まない学生は128名中68名、「本を読むことが面倒だと感じる／興味が湧かない」と答えた学生が55名いた。このような読書行為が少ない学生の中で、「教材に興味が持てず自分自身の意見も無いためグループで話すことが無い」と答えた学生もいた。全国を見ても令和6年度の学校読書調査⁽²⁾では、2024年5月1か月間の平均読書冊数は、高校生は1.7冊、不読者（5月1か月間に読んだ本が0冊の児童生徒）の割合は、高校生では48.3%にも上る。今後より一層、読むことに対する苦手意識を持つ学生や、興味関心を持てない学生が増えていくと見込まれる現況に対応していく必要がある。

以上の課題から、令和7年度国語Iでは、特に文学作品を扱う单元で、学生が文学に興味関心を持ち、いかに言語化スキルを育成できるかということを意識した授業の工夫を実践しているところである。次項にて、令和7年度開講科目「国語I」（担当：石川万里子）において実践した試みについて述べる。

2. 「国語I」文学作品に触れる单元での取り組み

2.1 授業の構成と取り組みの概要

当科目は1年生の必修科目で週に1回、通年開講の2単位科目である。教材は基本的に検定教科書を使用し、文学作品や言語活動においては独自のワークとプリントを用いて実施している。今回の文学作品に触れる单元では、安部公房「鞆」、夏目漱石「夢十夜」、芥川龍之介「羅生門」の3作品を扱った。また令和7年度は課題解決のために次の事項を意識し授業を構成した。

I. 授業冒頭での言語化ワーク

II. 「主観的な読み」、「可視化」を取り入れた学習

本单元での授業の構成は表1のとおりである。

2.2 授業冒頭での言語化ワーク

言語化のワークはこれまでにも実践してきたが、本年度から扱うテーマを変更した。これまでには新聞やネットのニュース記事を用いたもの、教科書にある文章をもとに1分

表1 授業の構成

週	時	授業内容
9	1	言語化ワーク⑧ 導入「なぜ文学を学ぶのか、文学の定義と意義を知る」 展開・「文学と作者」について各作者の背景を知る ・漢字と語句、安部公房「鞆」を通読→再読→「主観的な読み」を実施→全体共有 ・「鞆」の可視化／比喩表現「アレゴリー」について、「鞆」は何のアレゴリーかの問い合わせに班で取り組む
10	2	言語化ワーク⑨ 展開・漢字と語句、夏目漱石「夢十夜」を通読→再読→「主観的な読み」を実施→全体共有 ・「夢十夜」色の表現と幻想的な表現及びその効果について考える→グループで共有
11	3	言語化ワーク⑩ 展開・漢字と語句、芥川龍之介「羅生門」の通読(第一段まで) →再読→「主観的な読み」を実施
12	4	言語化ワーク⑪ 展開・漢字と語句、芥川龍之介「羅生門」の通読(第二段まで) →再読→「主観的な読み」を実施 ・下人の「正義感」のグラフと「感情」のグラフ
13	5	言語化ワーク⑫ 展開・漢字と語句、芥川龍之介「羅生門」の通読→再読(最後まで) 理解を深めたうえで「主観的な読み」を実施 まとめ・いくつか主観を考察しグループ→全体共有 ・感想及び発表

表2 言語化ワーク ルールとテーマ

ルール	①自分の実体験から得たこと・考えたことを話す ②専門用語や省略語は使わず平易な表現を用いる。 ③3分間話し続ける
テーマ	A群 ・「筆箱」なぜ今それを使っている? ・一週間の出来事をできるだけ具体的に ・「推し」、好きなもの、どこが好きで推している? ・「好きな料理」とその理由、思い出 ・「居心地がいい場所と不快を感じる場所」その理由 ・高専に入学した理由と今の思い B群 ・抽象絵から見えてきたもの（ワシリーカンディスキー「コンポジションVIII」を見て） ・「ヤバい」の便利さについて ・大ヒット映画・アニメ「〇〇」ヒットの理由は? ・日本の文化で好きなもの／海外の文化で憧れるもの ・熊本Cプラスチックの分別について

間スピーチや意見を交わすことを行ってきた。しかし、年々テレビのニュースや新聞を見ない学生が増加し、話の内容が充実しない現状があった。

そこで本年度からは、「自分自身が体験したこと・考えたこと」をベースに具体的に言語化するワークを取り入れた。ルールと実施したテーマの一部は表2である。

ルールとして、必ず自分自身が経験したこと、考えたことをできるだけ具体化することを意識させた。また、言語化がなぜ必要なスキルなのかを考えさせたうえで、相手に

伝えることを重視し、省略語や専門用語を平易な表現に言い換える、制限時間内に話しことを伝えた。時間は3分間とし、繰り返し行うことで序盤は話しきれない学生も徐々に話す長さが伸びてきた。

テーマのA群は「普段無意識的に行っている行動・考えの言語化」を目的として置いた。B群はテーマを基に自分自身の体験を振り返り、その時の感情や考えを詳述する練習を意図して置いたものである。A・Bテーマを交互に毎回の授業で行った。一見容易なテーマに感じられるが、実際3分間話しことなると難しい学生が多くいた。

また、普段の生活から言語化を意識付けさせるために、無意識的に行っている行動の理由を常に考えること、生活の中で「語彙」と「体験したときの感情」を蓄積しておくことを伝えた。

どの回のワークも、実体験に基づくテーマにしたこと、学生同士の興味関心も喚起することができ、ワーク後も自然と対話が生まれる様子が見て取れた。

2.3 「主観的な読み」・「可視化」を取り入れた学習

安部公房「鞆」、夏目漱石「夢十夜」、芥川龍之介「羅生門」の3作品を扱った理由は、これまでに高校1年生が学ぶ単元として教科書に採択されてきた作品であり、「鞆」は短編であるが、読解難易度がある程度高い点、象徴として登場する「鞆」の意味を学生自身がどのような社会的記号として捉えるか考えるうえで、主体的な読みができる点がある。「夢十夜」はモチーフが多く登場し、短編ながら幻想的な世界観や高度な表現を味わえる点があげられる。

「羅生門」は全国の高校1年生が学ぶ文学作品の定番として、昭和32年にはじめて3社に採録されてから平成25年版まで、全19社192種の教科書に採録されている⁽³⁾。短編でありながら構成が緻密であり、心理描写や情景描写が巧みに盛り込まれ、人間の本質や倫理観に迫る作品である。

文学を学ぶ単元の目標として、特に「羅生門」では以下の目標が主として置かれる。「思考力、判断力、表現力等読む文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価すること」(文部科学省)⁽⁴⁾人物の心情や考え方の変化を追うことを通して、物語の展開を把握する学習活動や、人間の本質や倫理観、「生」というテーマについて様々な手法を取り入れた教育活動が行われている教材である。

本年度は課題や現状を踏まえ、到達目標としてMCC国語教育領域目標「言語・文化 言語作品の読解を通して、人間や社会の多様な在り方についての考えを深め、自己を客観的に捉えたり自分の意見を述べることができる。」を置き、中心的な学習活動として「主観的な読み」を行った。また、学生の理解促進を補うために、登場人物の感情をグ

ラフ化する、情景の色に着目する等「可視化」して捉える学習を行い、文学への興味関心を喚起しようと試みた。

「主観的な読み」とは、学生が自らの経験や価値観をもとに、文章や登場人物の行動、作品の意義を見出していく読み方である。授業の中では「主観的」に作品を捉えることを意識してもらうために、「文学の定義」をはっきりさせ、主観的に読むとはどういうことか理解を深めたうえで読解を進めた。

まず、文学を「言語を媒材とし、詩歌・小説・戯曲・隨筆・評論などを通じて、作者の思想や感情を表現する芸術作品」(精選版 日本国語大辞典)と定義し、芸術作品を鑑賞する(=美術館で絵を鑑賞するように感じ、考え、解釈する)立場で文学作品を見つめてもらうと説明した。読者は文学作品を主観的に鑑賞できるものとして、それぞれの価値観に照らし合わせた「主観(=感じたこと、考え、解釈)」を得る。これを他者と共有することで、オリジナルの切り口から考察し、作品に新たな価値を与えていくことを授業の目的とした。

2.4 「羅生門」での「主観的な読み」・「可視化」

第3時の授業で「羅生門」の本文プリントを配布し、作品背景を押さえたうえで、ペアで第一場面の通読(1回目の読み)を行った。その後再読(2回目の深い読み)を行い、再読の後で、主観を整理させた。「作品の中で不自然な単語があった」、「登場人物の不可解なセリフがあった」、「再読してもわからない文章があった」、「自分の価値観とは合わない部分があった」など違和感がある部分、共感できる/共感できない部分を記述するように指示した。第一場面からは以下のような主観があげられた。

次に各自の主観をグループで共有し、メンバーと意見を照らし合わせる作業を行った。共有の際には「言語化」を意識し、自身の主観を具体的な経験や例を用いて話すことを指示した。この結果、個人の主観から表3下線のようにグループとしての意見や考察に昇華したところもあった。

表3 「羅生門」第一場面 学生の主観

・タイトル「羅城門」が「羅生門」になっているのはなぜ?
→生死の強調、下人の生きたい気持ちの伏線
・天気はなぜ雨だったのか? →下人の心象描写にしては単純
・なぜ秋にしたのか? なぜ夕方~夜にしたのか?
→下人の憂鬱な気持ちの表現だと思う
・なぜ蟋蟀? その効果は? →虫で表現するところが秀逸
・不気味な人目のつかない場所を選んで休むのはなぜか?
・下人がにきびを気にしている描写にしたのはなぜか?
・暇をだされてから今日までどうやって生きていたのか?
→下人は生命力が高い、生きたい意志の強さ
・急なサンチマンタリスムはなぜ? どんな効果?
・最初から暗くて気味が悪い作品を読むのはなぜ?
・下人はなぜ情緒不安定なのか?
→人間臭い印象と人間離れた印象が同居する人物

第二場面以降も通読→再読→主観の整理を繰り返した。加えて、下人と老婆の出会いから下人の心情の変化についてグラフで可視化する作業を行った。図1では、心情の変化には必ず原因があることを理解させたうえで、出来事を項目に置き、「下人の心情は何が原因で高揚 or 沈着しているのか」という問い合わせのもと整理を行わせた。心象表現は文章から要素を抽出しやすく、どの学生もスムーズに作業を行うことができていた。図2は「下人はこの場面で正義（飢え死に）or 悪（盗人）のどちらを選んでいるか」という問い合わせのもと整理させた。こちらも2択の問い合わせを設定したため、学生が能動的に作業に取り組むことができていた

このグラフ化は個人で作業した後、グループで議論し、議論をもとに再度整理させた。この「可視化」により下人の心情の変化や行動の理由が明確化できただけでなく、「羅生門」全体の展開の把握にも繋がっていた。分かりやすい問い合わせを設定し、可視化することで、文章読解が苦手な学生も解釈しやすく、皆が集中して作業に取り組む様子が見て取れた。

最後にまとめとして、「主観的な読み」で出た疑問点や気づきの中で、全体で共有したいものをあげ、セレクトしたものを考察する学習を行った。ここで改めて文学作品は個人が自由に鑑賞し、解釈を与えて良いものとすることで、文学作品への抵抗感を無くし、今後の文学への学びへとつなげる意図があった。あるクラスで話題に上がったのは「なぜ高校一年生が学ぶ作品が、不気味で暗い『羅生門』なの

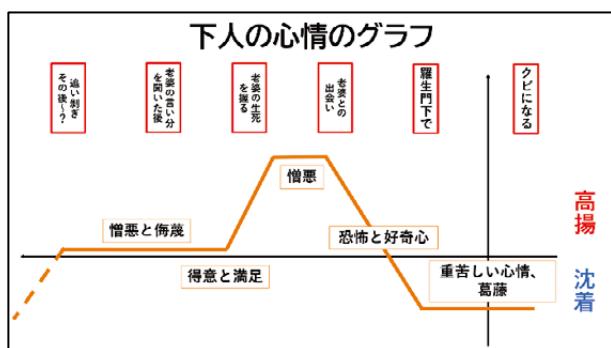


図1 下人の心情のグラフの一例

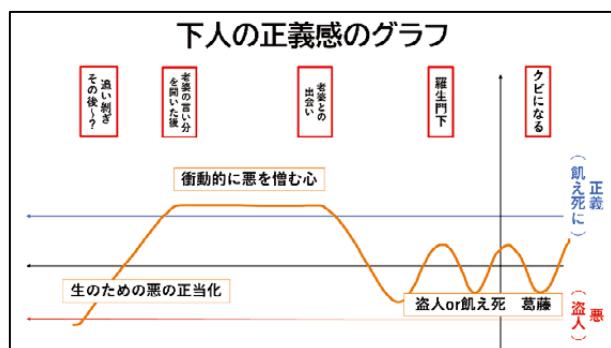


図2 下人の正義感のグラフの一例

か」であった。この問い合わせに対して様々な見方から活発に議論が交わされ、根拠をもとに個人の考えを「言語化」することができていた。今まで作者の意図や主題を捉える解釈行為を中心だった読みから、学生の主観的な気づきから考察し、作品に価値を与えるという主体的な読みができたと感じた実践だった。

3.まとめ

言語化能力育成と文学作品への興味関心の喚起という2つの課題に対して、学生が能動的に学びに取り組み、自身の考えを言語化することができていた点で、ある程度成果が認められたと言えよう。ただ場合によっては、言語化ワークが楽しい会話で終わる、文学の解釈が一人歩きする可能性もあるため、背景知識やグループでの対話を効果的に取り入れる必要がある。今後も学生同士の対話の機会を維持しつつ、育成したいスキルを焦点化する工夫を凝らしていきたい。

(令和7年10月7日受付)

(令和7年10月27日受理)

参考文献

- (1) 独立行政法人国立高等専門学校機構：「モデルコアカリキュラム」，
<https://www.kosen-k.go.jp/wp/wp-content/uploads/2023/12/c383e29-7e20-4b20-af19-ca3737450665.pdf>, (2025.9.21閲覧).
- (2) 公益社団法人全国学校図書館協議会：「学校読書調査の結果」，
<https://www.j-sla.or.jp/material/research/dokusyotousa.html>, (2025.9.21閲覧).
- (3) 幸田国広：「『定番教材』の誕生—『羅生門』教材史研究の空隙ー」，国語科教育, 74卷, pp14-21(2013).
- (4) 文部科学省：「【国語編】高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説」，
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/11/22/1407073_02_1_2.pdf, (2025.9.21閲覧).